

伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡出土古墳時代前期土器の編年的位置付けについて

長谷川 博幸

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに	3. 型式組列仮定の提示
1. 阿弥大寺本郷遺跡古墳時代前期遺構・遺物について	4. 画期の設定と編年案
2. 出土土器の分類	5. 群馬県内古墳時代前期土器編年での位置付け 6. まとめ

—— 要旨 ——

群馬県伊勢崎市田中町・韋塚町に位置する阿弥大寺本郷遺跡からは、東海系のS字状口縁台付甕、南関東系の単口縁台付甕、北陸系の特殊器台などの外来系土器を主とする古墳時代前期土器が出土している。それら土器について、分類・型式組列・編年を行なった。3期4段階に区分した編年について、既存研究と比較検討し、群馬県内の古墳時代前期土器編年での位置付けを行なった。

キーワード

対象時代 古墳時代前期
対象地域 群馬県
研究対象 土器

はじめに

伊勢崎市田中町・葦塚町に位置する阿弥大寺本郷遺跡は、古墳時代初頭から中世までの複数時代の遺構が確認された遺跡である。古墳時代前期の遺構からは、土師器がまとまって出土している。土師器には、S字状口縁台付甕、単口縁台付甕、特殊器台など、その系譜を群馬以外の地に求められる外来系土器がみられる。

筆者は本遺跡出土土器について、調査時から着目していたが、論考する機会を逸していた。今回、これら土師器について、器種ごとに分類、型式組列し、編年案を提示する。あわせて、群馬県内の編年と比較検討することによって、古墳時代前期における本遺跡出土土器の編年的位置付けを行う。

1. 阿弥大寺本郷遺跡古墳時代前期遺構・遺物について

阿弥大寺本郷遺跡(以下、本遺跡と記す)では、古墳時代前期の遺構として、住居・溝・流路・水田・遺物集中地点が調査された。住居47軒からは、甕・壺・高杯・器台・鉢・有孔鉢・台付鉢・蓋・埴・手捏ねが出土している。調査した住居47軒は、重複が多く認められた。そのため、今回出土土器の分類・編年作業を行うにあたり、遺構の帰属時期を考える上で、床面・床面付近の床上・床下等から出土した確実に住居に伴うと判断される土器を、基本的に対象とすることとした。また、本遺跡は、洪水や流路等に重複、あるいはそれが原因で喪失したと考えられる住居もあるため¹⁾、確実に住居遺構と考えられる遺構から出土した土器を対象とした。結果、対象となったのは、住居27軒から出土した土器である。

2. 出土土器の分類

出土した土器について、以下に分類詳細を述べる。区分については、器種ごとに大区分をA・B・C、中区分をa・b・cとし、さらに細分が必要なときは1・2・3と区分した。

(1)甕の分類(第1図) 甕は12種類に分類した。

甕A 平底の甕をAとした。口縁部が「く」の字状に立ち上がっており、球形状を呈する。整形の技法から、器面外面をハケメ整形しているものをA aとした。A aは、遺構に伴うもので完形品ではなく、口縁部片が多い。A bはA aに比べ口縁部が外反する。胴部は長胴化し、器面外面はハケメ整形のうちナデを施している。

甕B 口縁部に折り返しのあるものをBとした。本遺跡から出土したものは、肩部に縄文が施文されていた。

甕C いわゆる「S字状口縁台付甕」をCとした。口縁部の形態・整形技法、器面外面の整形技法等から5分類した。C aは肩部に横線(ヨコハケメ)を有するものとした。肩部の横線が喪失しているものをC bとした。C bはさらに細分する。C b 1は、口縁部中段内面に平坦面を有

し、口縁端部に向け直立気味に立ち上がるるものとした。C b 2は、口縁部中段内面に平坦部が無く、口縁が外傾気味に立ち上がる。C b 3はS字状口縁が形骸化しており、器形も他と比べ長胴化する。C cは、C b 1・2の器形に、口縁部が上へ伸長しているものである。

甕D いわゆる「単口縁台付甕」をDとした。D aは球胴型を呈し、「く」の字に屈曲する短い口縁部に刻み文を持つ。器面内外面にハケメ整形を施している。D bは口縁部の刻み文が喪失する。D cは、D bに比べ口縁部が伸長し、やや長胴化し、胴部中位に最大径を持つ。D dは長胴型を呈する。器面外面はケズリ整形している。

(2)壺の分類(第2図) 壺は8種類に分類した。

壺A 単口縁壺である。頸部から口縁にかけて、「く」の字に屈曲し立ち上がる。器面内外面にハケメ整形が施されている。体部は球胴形を呈する。

壺B 口縁部が長い単口縁壺である。口縁部が、直線的に伸びて広がるものをB aとした。B bは頸部から口縁端部にかけて外傾して立ち上がり、球胴形を呈する。B a・B bとも口縁端部に面取りが施されている。

壺C 口縁部が屈曲して開く有段口縁壺である。頸部から直立して立ち上がり、有段状に屈曲して外反して開く。器面内外面にヘラミガキが認められる。

壺D 壺Dは口縁部が長い咲形の壺である。D aは口縁が外傾して立ち上がり、球胴形を呈する。外面はヘラミガキにより整形されている。D bは口縁が直立して立ち上がり、球胴形を呈する。口縁部から胴部中位にかけてミガキが用いられ、下半部は一次調整とみられるケズリが残る。

壺E 小型で口縁部が短い咲形の壺である。E aは短い口縁が外傾して立ち上がる。E bは短い口縁が外反して立ち上がる。口縁は稜を有している。

(3)高杯の分類(第2図) 高杯は8種類に分類した。

高杯A 稜線のある杯部に、脚部が大きく開く高杯である。A aは杯部が深く、口縁に向けてやや内湾ぎみに立ち上がる。脚部は柱状部から直線的に開き、6カ所の穿孔が見られる。内外面とも縦方向のミガキで整形されており、脚部には横ハケメが施されている。A bは、A aと変わらない口径であるが、口縁に向けて直線的に立ち上がる。整形は縦方向のミガキだが、口縁部は横方向のミガキが施されている。

高杯B 単口縁の杯部に稜を有さず、裾部が広がっていく高杯である。B aは杯部が内湾気味に立ち上がり、脚部の開きも内湾気味である。脚部には穿孔を有している。B bは、杯部が直線的に立ち上がり、脚部も直線的に開く。脚部の穿孔は縦に2孔である。

高杯C 楠形の杯部を有し、口縁部が屈曲し、段を持って開く。脚部に穿孔がある。器面内面はミガキ整形されており、外面はハケメ整形のうちミガキを施している。

高杯D 小型、低脚の高杯である。D aは、浅い杯部を有し、脚部が直線的に開く。脚部には穿孔が見られる。杯部内外面・脚部外面はミガキにより整形されている。D bはD aに比べ杯部が浅くなり、脚部も大きく開く。脚部の穿孔は見られない。

高杯E 有稜の杯部に柱状脚部を有する。脚部は、裾部が屈曲して開く。

(4)器台の分類(第2図) 器台は9種類に分類した。

器台A 単口縁で小型の器台である。受け部が直線的に開き、受け部の深さが浅いものをA aとした。A bは受け部口縁端部が外反し、受け部の深さが深い。

器台B 小型で、口縁端部が屈曲し、段を有するものをBとした。

器台C いわゆる「特殊器台」をCとした。C aは受け部に円形の穿孔を有する。C a 1は受け部に鐸をもち、口縁部が屈折して開き、口縁端部が有段状を呈す。C a 2は受け部に鐸をもち、口縁部が屈折して開き、口縁端部が有段状を呈すが、C a 1と比べ受け部が小さく、口縁部の深さも浅くなる。C a 3は屈折して開くが、口縁端部は有段状となっていない。また、受け部に鐸を持たない。C bは受け部に方形の穿孔を有する。C b 1は受け部に鐸をもち、屈折して開く。C b 2は受け部に鐸をもち屈折し、開くがC b 1と比べ屈曲が曖昧となる。C cは、受け部に穿孔が施されていない。鐸を持ち、屈曲して開くが、口縁端部には摘まむなどの調整が施されていない。

(5)鉢の分類(第2図) 鉢は4種類に分類した。

鉢A 単口縁、平底の鉢である。A aは、口縁部がやや内湾して立ち上がる。器面の整形は、内面が放射状の荒いヘラミガキ、外面が横方向のヘラミガキである。A bは、内面に稜を持ち直線的に立ち上がる口縁部を有する。器面の整形は、内外面ともに斜め方向のヘラミガキである。

鉢B 頸部が屈曲する鉢をBとした。B aは、頸部が「く」の字状に屈曲し、球胴形を呈する。B bは屈曲が曖昧になる。

(6)台付鉢の分類(第2図) 台付鉢は2種類に分類した。

台付鉢A 口縁部形態及び台部から分類した。Aは、球胴形の体部に屈曲する口縁部を有する。台部は体部からハの字状に開く。

台付鉢B 屈曲がAに比べ弱い。柱状の台部が付く。

(7)有孔鉢(第2図)

単孔の有孔鉢を分類した。単口縁のものを有孔鉢Aとし、折り返し口縁のものを有孔鉢Bとした。

(6)蓋の分類

蓋は1分類とする。椀形状の蓋部に、円盤状の摘みが付く。摘みは中空である。

3. 型式組列仮定の提示

(1)型式組列仮定の提示

分類した土器のなかには、器形の形態変化や整形技法の変化を示すものがある。それら変化を頼りに土器の型式組列を仮定し、提示する。

(2)甕の型式組列仮定

甕Aは口縁部の外傾から外反へという変化、ハケメ整形からナデ整形への整形技法の省力化から甕A a→A bという組列が想定できる。

甕Bは器形のわかる資料は1点のみの出土であり、本遺跡内で組列を想定するのは難しい。

甕Cは、肩部横線の喪失という変化からC a→C bという変化を想定する。C bについて、口縁部の変化から組列を想定したい。S字状口縁の中段内面平坦面の喪失という変化からC b 1→C b 2という組列を想定する。口縁部の形骸化という変化から、C b 2→C b 3という組列を想定する。

甕Dは、口縁部刻み文の消失からD a→D b、口縁部の伸展・球胴形から長胴形へという変化からD b→D cを想定したい。また、長胴化の伸展・ハケメからケズリへという整形技法の省力化からD c→D dという組列を想定できることから、D a→D b→D c→D dという組列を考えたい。

(3)壺の型式組列仮定

壺は、壺Bについて、口縁部端部の外傾から外反へという変化からB a→B bの組列を想定する。それ以外の壺は、出土数が少量のため、組列についての仮説を立てることを本稿では行わない。

(4)高杯の型式組列仮定

高杯Aは、杯部の口縁への立ち上がりが、内湾気味から直線的になるという変化から、A a→A bという組列を想定する。

高杯Bは、杯部及び脚部が内湾気味から直線的に開くという器形の変化からB a→B bという組列を想定する。

高杯Cは、器形のわかる資料は1点のみの出土であり、本遺跡内で組列を想定するのは難しい。

高杯Dは、杯部が浅くなるという変化、脚部が大きく開くようになるという変化から、D a→D bという組列を想定する。

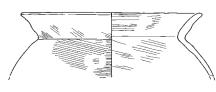
高杯Eは、複数の住居から出土するが、出土したものに、経時的变化を想定するだけの根拠を見いだすことができないことから、1型式のみとした。

(5)器台の型式組列仮定

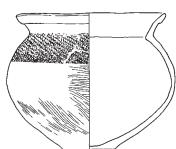
器台Aは、直線的に開く受け部から口縁端部が外反するという変化からA a→A bという組列を想定した。

器台Bは、出土数が少量であり、型式組列仮定を行わない。

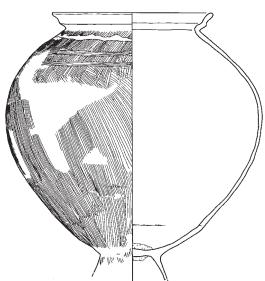
甕 A a



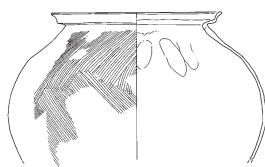
甕 B



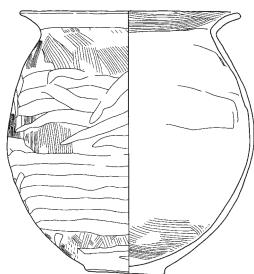
甕 C a



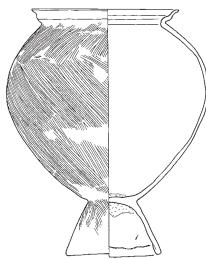
甕 C b 1



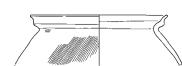
甕 A b



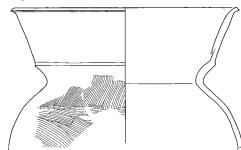
甕 C b 2



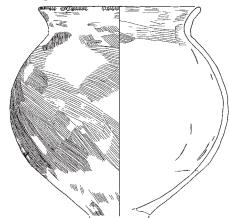
甕 C b 3



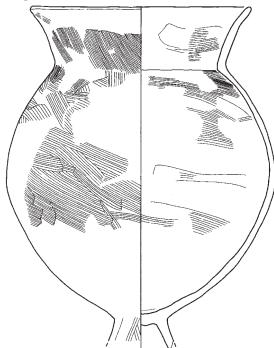
甕 C c



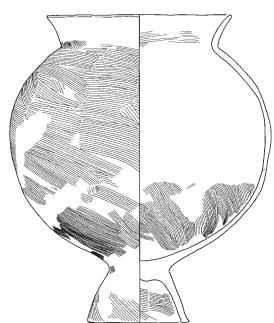
甕 D a



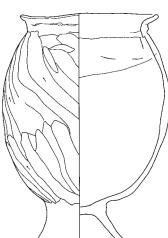
甕 D c



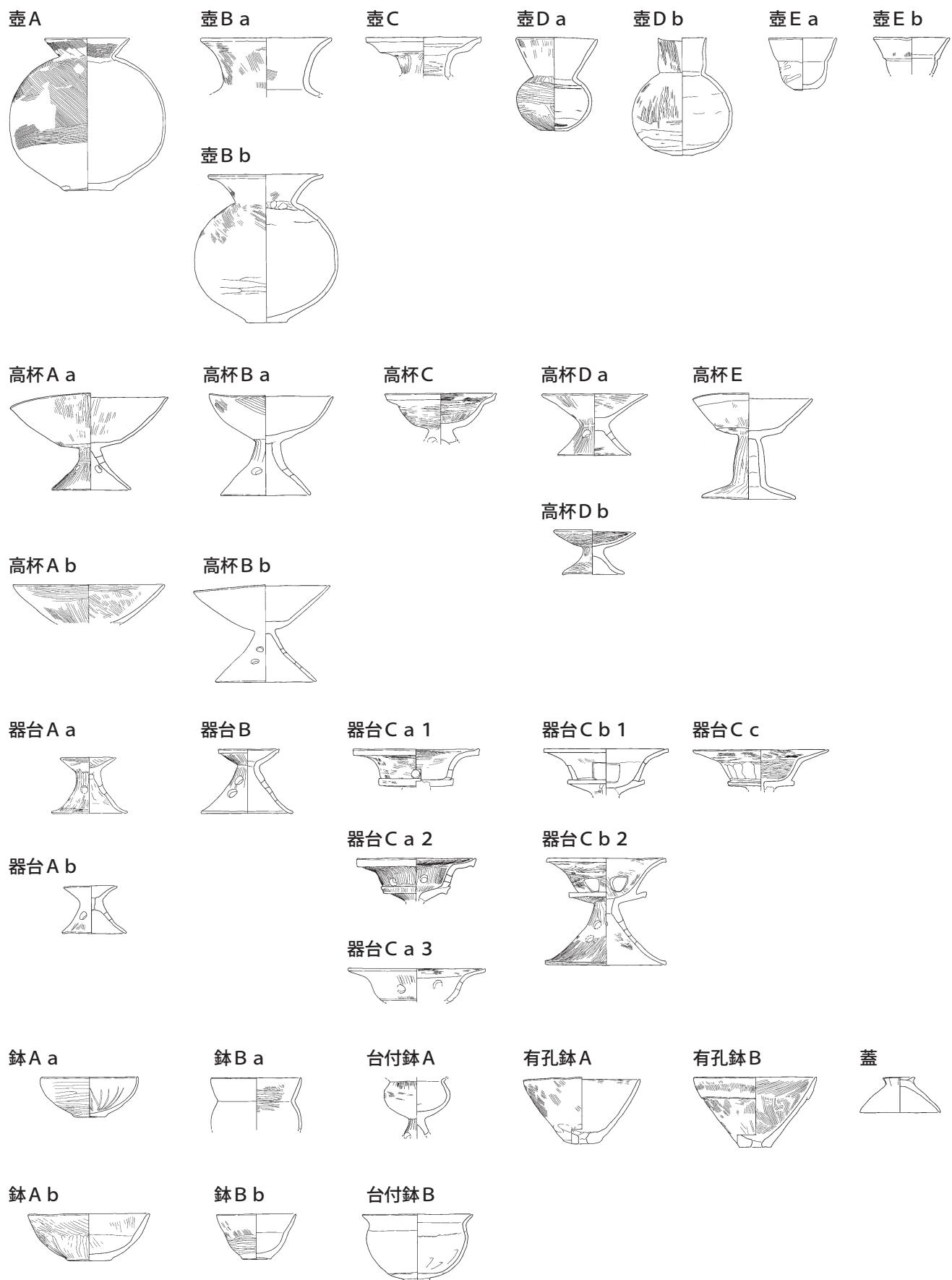
甕 D b



甕 D d



第1図 甕の分類(S=1/8、甕A b・D cは1/10)



第2図 壺・高杯・器台・鉢・台付鉢・有孔鉢・蓋の分類(S=1/8)

器台Cは、C aにおいて、受け部が小さく、口縁部が浅くなるという変化からC a 1→C a 2という組列を、鍔部の消失という変化からC a 2→C a 3という組列を想定する。C bでは、屈曲が曖昧になるという変化から、C b 1→C b 2という組列を想定する。C cは、穿孔を省略するという整形技法の観点から、C a・C bに後出すると想定する。鍔を有することから、C b 2に後出する可能性を考えたい。C a・C bは、穿孔形態により前後することも考えられるが、本遺跡の出土例からは前後関係を想定できなかった。

(6)鉢の型式組列仮定

鉢Aは、内湾気味に立ち上がる口縁から、直線的に立ち上がるという変化から、A a→A bという組列を想定する。

鉢Bは、頸部「くの字」屈曲が曖昧になるという変化が読み取れることから、B a→B bという組列を想定する。

(7)台付鉢・有孔鉢・蓋の型式組列仮定

台付鉢・有孔鉢・蓋については、出土数が少量であり、本稿においては型式組列仮定を行わない。

(8)型式組列の検証

(1)で想定した型式組列を、出土遺構ごとの共伴関係から検証する。第1表は、分類した土器型式を遺構ごとに並べ、想定した土器の組列順に並べたものである。

第1表では、想定した組列が、大局的に矛盾するところなく並んでいる。ただし、甕C aが単独で出土した遺構は無く、C b 2と共にしている。即ち、新しい型式が古い型式とともに出土している訳だが、これは両者ともに使われていたであろう状況を示している。このことは、本遺跡の出土土器を検討するのに重要な点であることから後述するが、他の結果から、想定した型式組列が妥当性のあるものと考えられる。また、組列を検証するに当たり、住居の重複関係からも検証を試みた。検証の結果、新旧関係の矛盾は見いだせなかった。重複する1区7号住居と1区4・5号住居では、甕C b 1が共通し、2区51号住居と2区33号住居では、甕C b 1・C b 2が共通して床面直上付近から出土している。これは、同時期内の短い時間幅の中での、建て替えと理解したい。

4. 画期の設定と編年案

(1)画期の設定

3で提示した型式組列及び、第1表による各遺構の遺物共伴状況から、本遺跡における出土遺物を4つの段階に区分した(第3図)。画期として、甕Cの出現と消失を想定し、3期に区分した。さらに甕C類が出土する2期内を、共伴関係から前半・後半とした。それぞれの段階について、以下に提示する。

(2)1期

1期は、甕A a、甕D a・D b、高杯A a、鉢A aが

主体となる。甕Cが共伴する住居は無いため、本遺跡ではS字甕が出現する前段階と考えたい。この期に比定される住居は2区14号住居・2区16号住居・2区43号住居である。

(3)2期

2期は甕C a・C b 1・C b 2が主体となる。C b 1からC b 2への型式組列を考慮して、画期としたいところであるが、C b 1が出土する住居9軒中、7軒ではC b 2が共伴する。C b 1とC b 2の共伴から、画期とは言い難い。しかし、C b 1・C b 2が共伴して出土する住居とC b 2のみが出土する住居では、共伴する他器種の土器に型式組列が看取できる。故に画期としたいところであるが、時間幅が短いと考えられ、小画期とし、前半・後半を設定した。

2期前半

2期前半は、甕C a・C b 1・C b 2、甕D d、壺B a、高杯A b、高杯D a、器台A a、器台B、器台C a 1・C a 2・C b 1が主体となる。器台Cは北陸に祖型が求められる特殊器台であるが、2期前半から登場する。甕C b 1は2期前半の中で収束するようである。甕C cが2区57号住居から出土している。この期に比定される住居は1区4号住居・1区5号住居・1区7号住居・2区22号住居・2区33号住居・2区38号住居・2区40号住居・2区51号住居・2区57号住居である。

2期後半

2期後半は、甕C a・C b 2、甕D d、高杯B a・B b、高杯D b、器台C b 2が主体となる。甕C b 3は1軒からのみの出土であり、甕C b 3の出現が画期となる理由を見出すことができないので、2期後半におさめる。この期に比定される住居は、1区2号住居・1区8号住居・2区19号住居・2区28号住居・2区30号住居・2区32号住居・2区53号住居である。

(4)3期

3期は、甕A b、壺B b、高杯E、器台A b、鉢A bが主体となる。S字甕を持たない土器の組み合わせである。整形の技法は、ハケメからナデ・ケズリが主だったものになる。高杯は、ラッパ状に開く脚部から、柱状の脚部に裾が開くものが出現する。この期に比定される住居は、1区1号・2区18号・2区21号・3区3号・3区4号・3区6号である。

5. 群馬県内古墳時代前期土器編年での位置付け

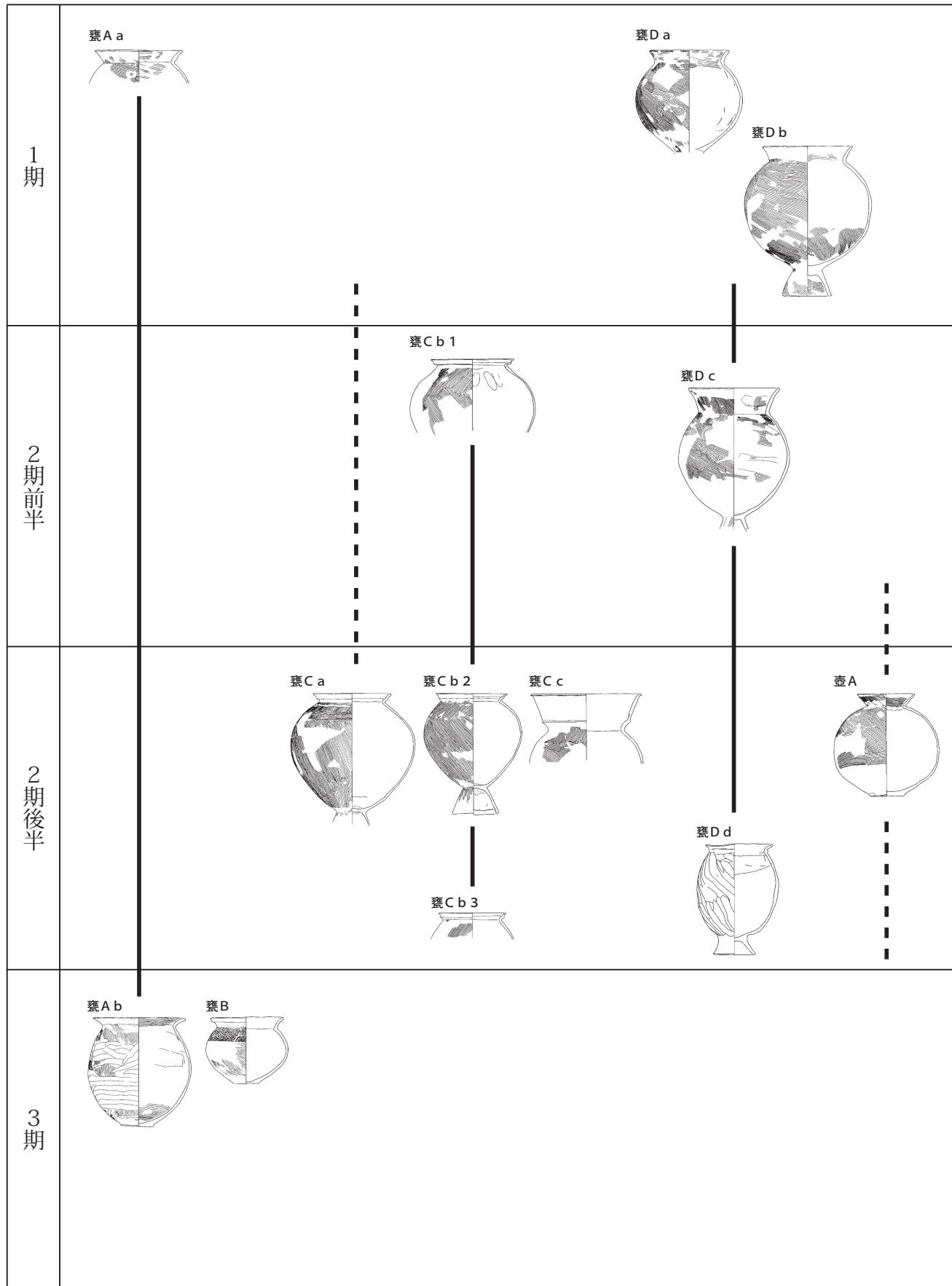
(1)古墳時代前期土器研究史

本遺跡の古墳時代前期土器編年であるが、群馬県内の土器編年の中でどのように位置付けられるであろうか。先行する古墳時代前期土器研究の歩みについて述べたのちに、それら研究成果の中での位置付けを検討する。

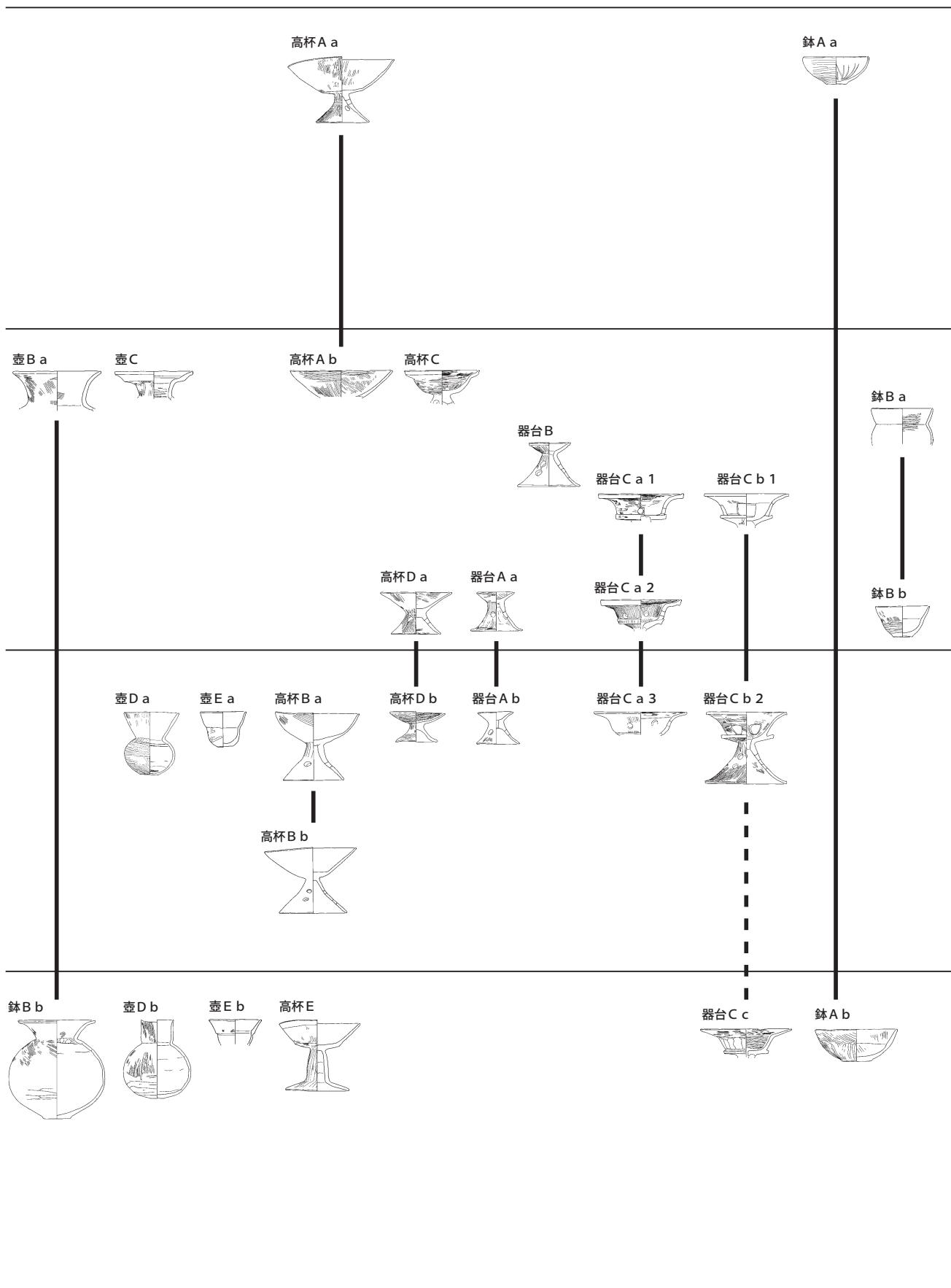
群馬県の古墳時代土器研究は石田川遺跡の調査と報

第1表 阿弥大寺本郷遺跡 出土土器組成表 ●床面及び床面付近出土遺物 ○埋没土中出土遺物

区	2	2	2	1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	2	2	2	1	2	2	2	1	2	1	2	3	3	3				
遺構番号	16	14	43	7	38	51	22	40	57	4	5	33	2	30	32	53	3	19	28	36	8	21	1	18	3	4	6				
遺構種	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居					
器種	1期			2期前半						2期後半						3期															
甕	A a	●	●		●										●	●															
	A b																														
	B																														
	C a	○			●	●	●	●				●	●	●	●																
	C b 1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●																			
	C b 2			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										
	C b 3																					●									
	C c							●																							
	D a	●																													
	D b		●																												
	D c									●																					
	D d																				●										
壺	A											●																			
	B a												●																		
	B b																						●								
	C											●																			
	D a									●												●	●	●							
	D b																						●								
	E a																				●										
	E b																						●								
高杯	A a	●																													
	A b												●	●																	
	B a																														
	B b																														
	C											●																			
	D a									●																					
	D b												●																		
	E a																				●										
	E b																						●								
器台	A a											●									●										
	A b																						●								
	B						●																								
	C a 1							●																							
	C a 2									○	●																				
	C a 3									○																					
	C b 1									●																					
	C b 2																							●							
	C c																														
鉢	A a	●																													
	A b																														
	B a								●																						
	B b									●																					
台付鉢	A																			●											
	B																						●								
有孔鉢	A		●																					●							
	B																														
蓋													○	●																	



第3図 土器の編年(S=1/12、甕A b・D cは1/14)



告から始まったと言える。1968年に刊行された「石田川遺跡」発掘報告書に際し、松島榮治氏が提唱した「石田川式土器」の研究がそれである(尾崎・今井・松島1968)。以来連綿と研究が続けられている。1970年代には梅澤重昭氏が論を進めた。梅澤氏は米沢二ツ山古墳墳丘下の住居から出土した土器について分析し、南関東や北陸、東海等の影響を受けた文化の混在状況を指摘した(梅澤1971)。1978年には五反田遺跡2号住居出土土師器を基準に、「石田川I・II式土器」の編年を提示した(梅澤1978)。

1980年代になると、開発行為に伴う発掘調査の急増により、古墳時代前期土器資料が蓄積されていく。そのような状況の中、1981年には梅澤氏・橋本博文氏が、群馬県内各地での弥生式土器とS字状口縁台付甕の関係について論じた(梅澤・橋本1981)。同年には、田口一郎氏が元島名将軍塚古墳から出土した土器を基準に井野川水系のS字状口縁台付甕の編年を提示している(田口1981)。また、田口氏は2000年に増加した資料を元に、再検討を行っている(田口2000)。

1993年に行われた日本考古学協会新潟大会(いわゆる新潟シンポ)において、橋本氏が群馬県を中心とする関東北部の古墳時代前期を包括する土器編年を提示した(橋本1994)。1990年代には、若狭徹氏や深澤敦仁氏が精力的に研究を行っている。若狭氏は弥生時時代後期から古墳時代前期にかけて、樽式土器など在来系の弥生式土器の様式が崩壊し、S字状口縁台付甕を含む外来系土器を受容するプロセスについて、井野川流域を事例として論じた(若狭1990)。深澤氏は、群馬県各地を、井野川流域(高崎市・旧群馬町他)・渡良瀬川流域(太田市他)・鏑川流域(藤岡市・富岡市他)・赤城南麓域(前橋市・伊勢崎市他)・榛名山東麓域・赤城山西麓域(渋川市・旧赤城村他)・利根川上流域(沼田市他)の6地区に分け、古墳時代前期土器編年を示した(深澤1998)。さらに若狭氏は、深澤氏の地区割りを細分し、弥生時代以来の在来系土器を使用していた集団が、外来系土器を使用する集団と混成しながら新たな地域社会を形成する様を論じた(若狭2000)。若狭・深澤両氏は2005年に共同で、群馬県古墳時代前期の編年案を提示し、古墳時代前期を前段階・中段階・新段階の3期とした²⁾。併せて、群馬地域南部³⁾の集落出土土器編年案を提示した(深澤・若狭2005)。深澤氏は、小林修氏とともに群馬地域北部の編年案を示し(深澤・小林2006)、2008年に太田地域の仔細な土器編年案を示した(深澤2008)。

(2)先行する土器編年との比較・検討作業

これら先行研究が提示する編年と阿弥大寺本郷遺跡編年案を比較したい。作業としては、まず田口氏のS字甕編年(田口2000、以下田口編年と記す)と比較する。これは、本遺跡から出土した土師器の中心がS字甕である

からである。次に、若狭氏・深澤氏が示した群馬地域南部の編年(若狭・深澤2005、以下若狭・深澤編年と記す)と比較するが、これにはいくつかの理由がある。まず、この編年が、現在弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器研究において汎用的に使用されている新潟シンポ編年に対応しているからである。さらに、この編年は依拠資料として田口氏の編年が使われており⁴⁾、田口氏の編年との比較結果が反映できると考えたからである。また、提示されている地域が、阿弥大寺本郷遺跡が所在する地域⁵⁾と隣接する地域であり、大きな影響を受けている可能性も踏まえた。管見によれば、群馬県内地域の仔細な編年は、若狭氏・深澤氏が行った群馬地域南部、深澤・小林氏が行った群馬地域北部、深澤氏による太田市地域の編年案である。それら三つの地域のうち群馬南部地域と比較するのは、地理的な状況からも必然と言えよう。

(3)田口編年との比較

田口氏の編年と本遺跡の編年を比較する。田口氏はS字甕について、第4図及び以下のようにI～VII類に分類し、細分している⁶⁾。

I類一口縁部刺突文を主な指標。

II類一口縁部刺突文の喪失、頸部内部のハケメ、を指標。

口縁形態・肩部横線等の属性によりa・b・c類に三細分。

III類一頸部から下がった肩部横線、頸部内部ハケメの喪失、胴部外面ハケメ以前のヘラケズリを主な指標。胴部形態一肩の張る球形から長胴化。口縁端部形態一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる等の属性でa・bに二細分。

IV類一肩部横線の喪失、胴部外面のハケメ以前にヘラケズリを主な指標。胴部形態一肩の張る球形から長胴化。

口縁端部形態一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる。口縁の立ち上がり一外に開く・上部が立ち上がる等の属性によりa・b・c類に三細分。

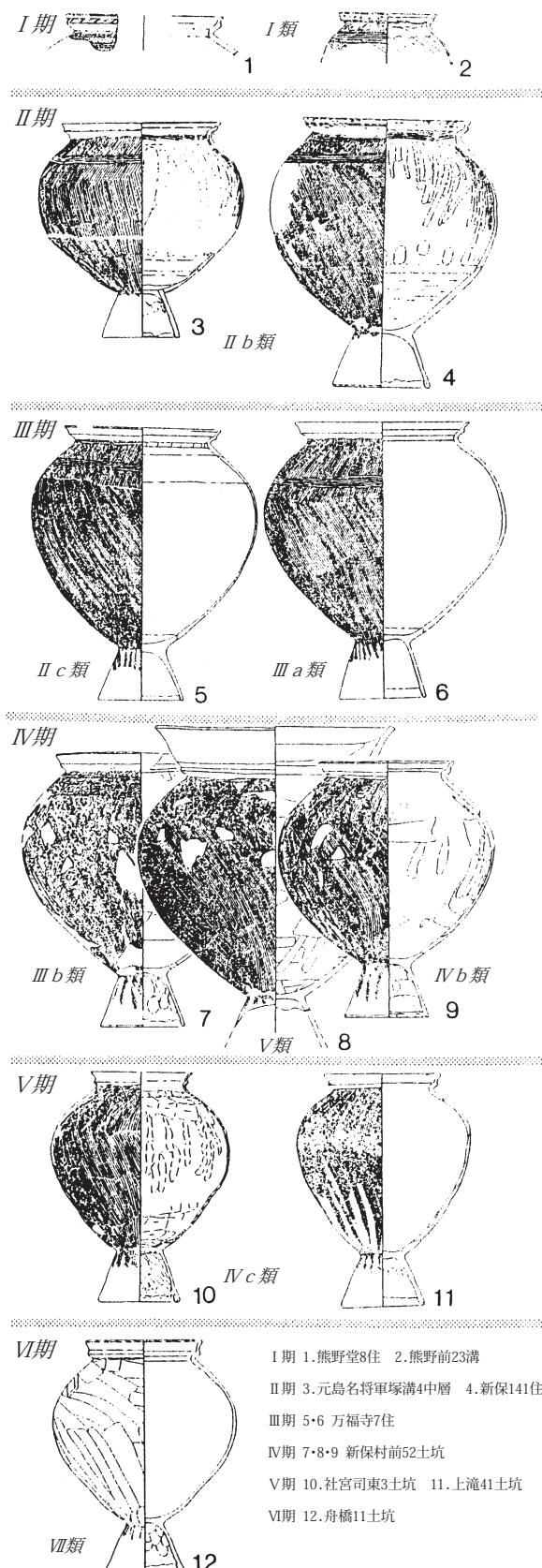
V類一通常のS字状口縁台付甕の口縁部上部に拡張部が付加(所謂山陰系甕との折衷)。

VI類一IV類の亜種か、模倣された「S字甕もどき」か。位置付けを保留。

VII類一胴部外面ハケメの喪失。

さらに、器種の型式的変遷、出土遺物の共伴関係、出土位置の層位的関係などから、I期～VII期の7段階に編年している。

まず、田口氏が分類したS字甕と本遺跡出土のS字甕(甕C)を比較する。甕C aは肩部横線文が認められる。この特徴からは、田口編年のII類・III類が該当する。さらに、甕C aには頸部内部のハケメが施されておらず、III類に相当すると考えられる。III類はさらに細分しているが、甕C aではそこまで細分できなかったので、III類



第4図 井野川流域におけるS字甕編年
(田口2000から転載)

相当に留めたい。

甕C bは肩部横線が喪失しており、IV類に相当する。甕C bはさらに細分したが、甕C b 1は口縁部内面に平坦面を持つ。これはIV類でもa類に相当する。甕C b 2は口縁部内面に平坦面を持たないこと、長胴化が見られないことからIV類b類相当と捉えたい。甕C b 3は、長胴化が見られることから、IV類c類相当と考えられる。口縁部が上方に拡張する甕C cはV類に相当するであろう。

田口氏の編年では、横線部を持つIII類と横線を持たないIV類が共存している。III期では、III類aとIV類aが共存している。IV期ではIII類b・IV類b・V類が共存しており、続くV期ではIV類cが続く。

本遺跡では、甕C b 1と甕C aの共存が2期前半、甕C b 2と甕C aの共存は2期後半である。甕C cが甕C a・甕C b 2と共に存する住居が1軒だけある。このことから本遺跡は2期前半が田口編年III期、2期後半がIV期に併行すると言える。ただし、前述したように2期は、時間幅が短いことから、田口編年のIII期末からIV期に相当すると言えよう。さらに、V期であるIV類cに相当する甕C b 3も、S字甕の出現と消失という観点から2期に含めた。本遺跡の2期は田口編年のV期の早い段階も含まれる可能性が考えられる。2期に接続する1期は田口編年III期、3期は田口編年V期に相当することが想定される。

(4) 若狭・深澤編年との比較

深澤・若狭編年であるが、第5図に示した。古墳時代前期古段階の器種構成は、甕D（「く」の字口縁台付甕）・E（S字甕）+壺B（複合口縁広口壺）・C（パレススタイル壺）・D（単口縁壺）・F（ヒサゴ壺）+高杯B（東海系大型高杯）・C（東海系小型高杯）+器台C（装飾器台）である。東海西部系色の強い器種構成となっている。古墳時代前期中段階の器種構成は甕E+壺C・D・E 1（伊勢型二重口縁壺）・E 2（伊勢型亜系単口縁広口壺）・F+高杯B・C+鉢B（小型丸底鉢）である。その様相は、東海西部地域の土器様式に一見酷似するが、高杯の一部に北陸系、小型器種の一部に機内系を取り込んだ器種構成となっており、技法・形態ともに故地のものとは異なる点が多いことから、在地化した独自の様相（石田川式）と理解することが適切である。古墳時代前期新段階の機種構成は甕E+壺D・E 1・E 2・F+高杯D（畿内系屈折脚高杯）+器台B+鉢Bとなり、新たに高杯D（畿内系の柱状屈折脚高杯）が組成する点が大きな特徴である。甕Eが長胴化し、ハケメの簡素化やハケメを施さない削り出しのS字甕が出現する⁷⁾。

深澤氏は、この編年について、古段階の指標は、田口編年のS字甕II類古相の存在とし、中段階の指標はS字甕III類の存在、新段階の指標はS字甕IV類・VI類の存在

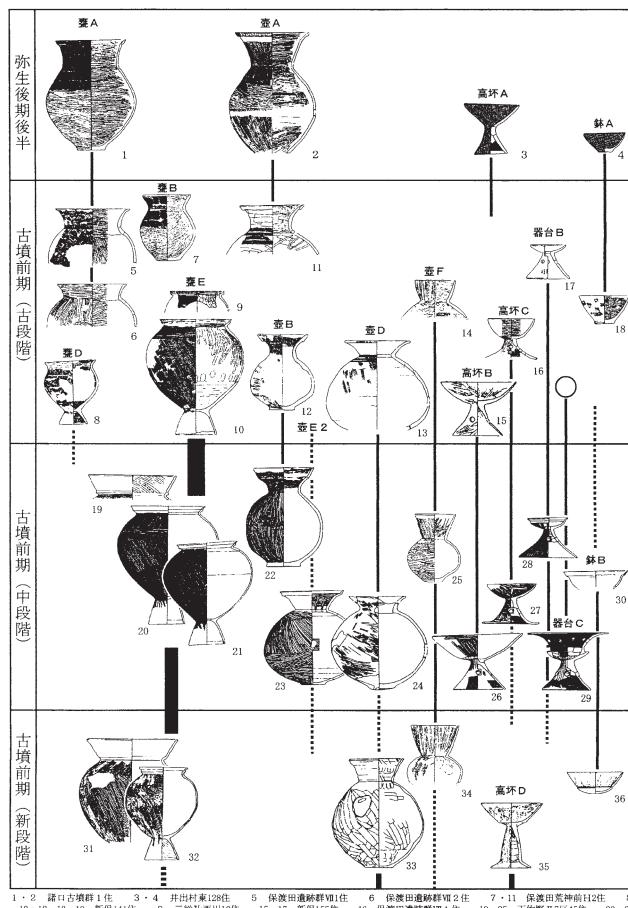


図3 群馬地域(南部)における集落出土土器による編年案(S=1/10)

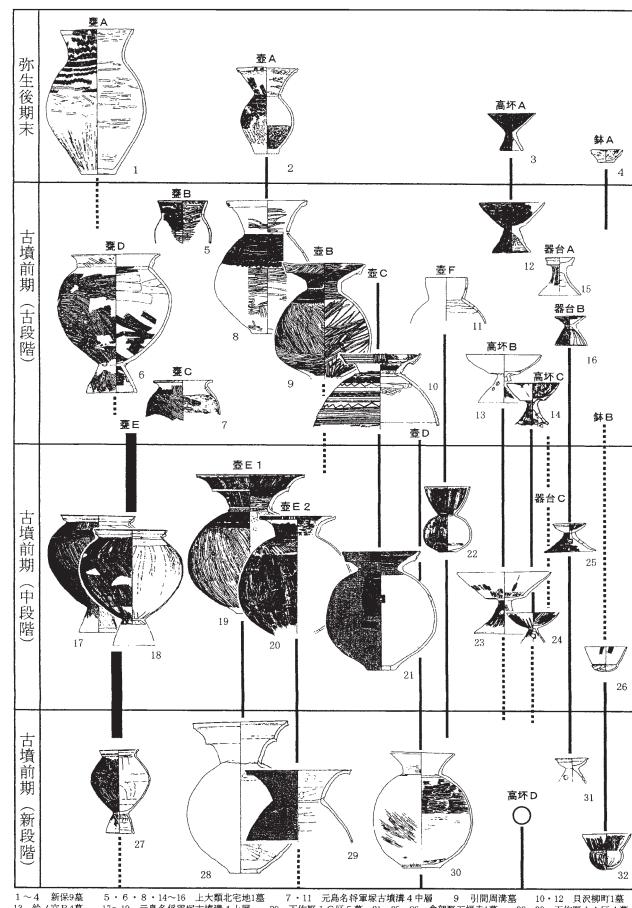


図4 群馬地域における墳墓および墳墓関連遺構出土土器による編年案(S=1/10)

第5図 群馬地域(南部)における集落出土土器(左)・墳墓および墳墓関連土器(右)による編年案
(若狭・深澤2005を50%縮小し、転載)

第2表 阿弥大寺本郷遺跡前期土器編年及び比較検討編年対応表

阿弥大寺本郷遺跡編年	田口編年	若狭・深澤編年	新潟シンボ
1期	III期	古墳時代前期	7期
2期	前半	中段階	8期
	後半		
3期	V期	古墳時代前期 新段階	9期

であるとしている⁸⁾。

本遺跡の編年と比較する。本遺跡1期とは、高杯Aを比べたい。高杯A aは、東海系大型高杯である。若狭・深澤編年の高杯Bに相応する。その形態は、杯部が大型化し、古段階のものより中段階のものに類似する。S字甕は、古段階の指標とされる田口編年II類相当のものが本遺跡からは出土していない。これらのことから、本遺跡1期は、古墳時代前期中段階と言える。

本遺跡2期は甕C aが田口編年III類相当であること、田口編年IV類に相当する本遺跡甕C b 1・C b 2が、在地化したS字甕の様相を呈していることから中段階と言える。また、本遺跡2期は、若狭・深澤編年で新段階としているS字甕に相当する甕C b 3を含めている。2期は中段階から新段階の早い段階も含まれる時間幅と考えられる。3期は柱状屈折脚高杯の登場から、古墳時代前期新段階と言える。

6. まとめ

阿弥大寺本郷遺跡出土古墳時代前期土器を分類・型式組列し、3期4段階の編年を提示した。あわせて、先行する研究の編年案と比較し、編年の位置付けを検討した。その結果、1期は深澤・若狭氏の編年の古墳時代前期中段階、2期は中段階から新段階、3期は新段階に併行すると考えられる(第2表)。

本遺跡の古墳時代前期土器について分類・編年を組むという目的は達せられた。本来であれば、地域内の近接する遺跡の出土遺物内容と比較検討し、編年の位置付けを試みるべきであろう。この点については、筆者の力量不足であり、既存研究に頼ってしまう結果となった。本遺跡を含む国道354号バイパスの調査では、隣接する東上之宮遺跡や下之宮高保遺跡などで古墳時代前期の遺構が検出され、遺物の出土もわかっている⁹⁾。これら遺跡を含めて、本遺跡が所在する地域の土器様相について、今後改めて論考したい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、関晴彦氏には遺物実見のお世話になり、調査時の情報についても教えていただきました。また、大木紳一郎氏・友廣哲也氏には日頃から、弥生時代から古墳時代にかけての土器についてご教授いただいております。ここに記してお礼申し上げます。今回小稿ではありますが、論考を記すことができ、大木氏・友廣氏お二方から受けた学恩に対し、幾許か報えることができました。

註

- 1) 2区11号・12号・13号住居は遺物が出土しているが、2号流路と重複しており、全体像が不明であるため対象としなかった。
- 2) 論文中では、古墳時代前期3様式細分の前段階としての弥生時代後期後半を加え、4段階としている。(若狭・深澤2005 pp.221)
- 3) ここで含まれるのは、榛名山東南麓の井野川流域を核とした地域。合併前の高崎市域、旧群馬町などである。
- 4) 他にも若狭氏の編年(若狭1990)を根拠としている。(若狭・深澤2005 pp.221)
- 5) 阿弥大寺本郷遺跡は、この論文では那波地域(利根川低地帯南岸地域、前橋市南部、高崎市東端部、玉村町など)に含まれる。
- 6) 田口2002pp.94-95を参照した。
- 7) 若狭・深澤2005 pp.221-222を参照した。
- 8) 深澤2008pp.468を参照した。
- 9) 群埋文2012pp.27-28、群埋文2013bpp.41

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
飯島克己・若狭徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9
梅澤重昭 1971『太田市米沢二ツ山古墳』群馬県教育委員会
梅澤重昭 1978『群馬県太田市五反田・下諏訪遺跡』太田市教育委員会
梅澤重昭・橋本博文 1981「4. 群馬県」『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』
大木紳一郎 1980『庚塚・上・雷遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎 2001「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎 2011「喜多町遺跡出土の古墳時代前期の土器」『喜多町遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎 2012「古墳時代前期の土器について」『田口上田尻遺跡 田口下田尻遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
尾崎喜左雄・今井新次・松島榮治 1968『石田川一石田川遺跡調査報告一』『石田川』刊行会
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『年報31』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013a『阿弥大寺本郷遺跡』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013b『年報32』
小島敦子 2009『古墳時代前期の土器編年』『荒砥前田II遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗 2005『土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心にして』『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』
田口一郎 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
田口一郎 1987「パレススタイル壺の末裔たち」『欠山式とその前後 研究・報告編』
田口一郎 1998「新たな土器が成り立つとき」『かみつけの里博物館第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』
田口一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』
友廣哲也 1991「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2
友廣哲也 1996「群馬県の北陸土器と古墳時代集落の展開」『古代』102
友廣哲也 2013「古墳時代北関東の交流」『技術と交流の考古学』
橋本博文 1994「関東北部における古墳時代出現期の様相」『東日本の古墳の出現』
深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』X
VI

研究紀要33

深澤敦仁 2008 「第9章考察1 太田地域における古墳時代前期の土器
編年試案」『成塙向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

深澤敦仁 2013 「2・3世紀の毛野の集落と墳墓」『ふたかみ邪馬台国
シンポジウム13—邪馬台国時代の関東と近畿』

深澤敦仁・中里正憲 2002 「群馬県玉村町所在・砂町遺跡出土の北陸系
土器の位置づけをめぐって」『研究紀要』20 財団法人群馬県埋蔵文化
財調査事業団

深澤敦仁・小林修 2006 「渋川市赤城町所在・滝沢天神遺跡2号住居出
土古式土師器の位置づけ—群馬県渋川地域の古式土師器の編年作業を通
して—」『研究紀要』24 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

若狭徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手
帳』1

若狭徹 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」『かみつけの里博物館
第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』

若狭徹 2000 「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態—群馬県地域の
場合—」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』

若狭徹・深澤敦仁 2005 「北関東における古墳出現期の社会」『新潟県
における高地性集落の解体と古墳の出現』